

第33回 JIA 神奈川建築 WEEK かながわ建築祭 2022

未来へ残すもの、変えてゆくもの

開催日：2022年3月4日（金）～3月6日（日）



神奈川地域会
八板晋太郎

昨年より1ヵ月も遅い春一番が吹いた3月初旬の週末、JIA 神奈川が主催するイベント「かながわ建築祭2022」が開催された。昨年はコロナ禍のため非公開での卒業設計コンクールのみとなったが、今年は全ての企画を実行することができた。この数年間、JIA 神奈川では『『サステナビリティ』を考える』をテーマにさまざまな活動を展開してきた中で、「未来へ残すもの、変えてゆくもの」と題したこのイベントはその総括ともいえる充実した内容となった。以下、開催順に各企画のレポートをお届けしたい。

まち歩き「旧根岸競馬場の保存に向けて」

—山下居留地、山手の丘、根岸 J.H. モーガンの建築を巡る—

今回のまち歩きは、保存活用に向けた動向が注目される旧根岸競馬場を目的地とした。根岸競馬場は江戸末期に日本初の洋式競馬場として開設され、唯一現存する一等馬見所^{ばけんじよ}は横浜で設計活動をした建築家J.H. モーガンの設計による。コースはまず山手の丘の突端にあるアメリカ山公園に登り、江戸初期の新田開発から始まり山下居留地を起源に持つ市街地を見渡すところから出発し、尾根道伝いに同じくモーガンの作となる山手111番館、山手聖公会、ペーリックホール、その他いくつかの近代建築や遺構を見ながら旧根岸競馬場に辿りついた。

鉄骨の大屋根はすでに解体されているが、3本のエレベーター塔が象徴的に聳え立つファサードは往時の趣を感じさせ、現在も地域のランドマークとなっている。米軍接收後に市に返還されたものの改修は手つかずの状態で、外壁は藁で覆われて劣化が進み、今後は保存に向けてドローンによる3D測量などが求められていることが解説された。その後、ディペンデントハウス（占領軍住宅。市へ返還後、今年末までに解体予定で建築学会から保存

要望書が出されている）を経て、隣接する丘にある地藏王廟（中華系の共同墓地）から旧根岸競馬場を遠望するところで総距離約6km、高低差30mを3時間で巡る全行程を終えた。横浜の都市の成り立ちは開港以来の近代発展史そのものともいえ、テーマを持って能動的に歩くことでまちの歴史を空間的に追体験することができた。

シンポジウム「設計者選定制度のこれから」

昨秋のJIA 神奈川のイベント「建築フォーラム2021」での議論を受け、今回のシンポジウムでは「設計者選定制度」を取り上げた。「公共建築の設計者をどのように選ぶべきか」という大きなテーマに対し、地元行政と近い地域会の特性を活かし横浜市建築局との共催とし、発注者とそれを支援する専門家、応募する建築家のそれぞれの立場から対面で議論する貴重な機会となった。

パネリストは、肥田雄三氏（横浜市建築局 公共建築部長）、小野田泰明氏（東北大学大学院 教授）、藤沼傑氏（ウィスト建築設計）、田邊雄之氏（田邊雄之建築設計事務所）で、司会・モデレーターは小泉雅生氏（JIA 神奈川 代表）が務め、前半は各パネリストによるプレゼンテーション、後半はその内容を受けたディスカッションが行われた。

まず小野田氏から、これまで設計の前段階である「プレデザイン」を担う専門家として数々のコンペ・プロポーザルに関わり、各地の行政に対して支援を行ってこられた立場として、日本の設計者選定の歴史を5期に区分し、請負・入札からコンペ、プロポーザル、2段階デザインビルドなど方式の多様化に至る現在までの変遷をたどるレクチャーがあり、建築学会でのガイドライン策定の経緯や、法律上コンペ方式が基本にあり2次審査に若手を入れることも明示されているフランスの事例など



まち歩き 一等馬見所での解説の様子



シンポジウム ディスカッションの様子 (KGU 関内メディアセンター)



シンポジウム 会場との質疑応答



卒業設計コンクール 公開審査の様子(横浜市民ギャラリー)

が紹介され、これからの仕組みづくりが課題であることが問題提起された。

田邊氏は応募者の視点として、情報収集や登録の煩雑さ、事務所所在地による制限、前職や海外での実績が評価されないことなどが若手参加の障壁となっていること、採点基準が不明瞭で、提案書の文字や図版の量は増加傾向にある一方で無報酬の場合が多いことなどを課題として挙げ、やはりフランスの事例として、2次審査参加者には基本設計料の8割が支払われ、プログラミストという運営側を支援する職能があることも紹介された。そして募集情報や登録の一元化、プログラム作成の専門家の地位確立、1次審査の簡素化と2次審査の有報酬化、JIAによる組織的サポートなどの改善策が示された。

藤沼氏はまず自身の経験から、中国・韓国では入札は法的に禁止され、一定額以上の業務は全てコンペとなるため日本のプロポーザルと違い膨大な成果物が求められること、次に、以前在籍されていた組織設計事務所ではプロポーザルに特化した部門が情報の収集分析や現地調査を行うことで勝率を高めていることが紹介され、結果として全国の公共施設の多くを東京の一部の事務所が担う現状には疑問も示された。そして大井町駅前トイレのコンペでの成果から、JIAが公益団体として、若手から組織系のベテラン、ファシリテーターまで含めプロジェクトごとに発注者を支援する可能性を持つことが提言された。

肥田氏からは、横浜市ではプロポーザルを基本(全体の約4割)としながら、規模や内容により入札・随契も併用しており、これ以上プロポーザルを増やすのは業務量的に難しいこと。実績要件については対象期間や規模、用途などを段階的に緩和しており、文章のみの簡易な提案書により省力化しながら内容で選ぶことも行っていること。審査する立場からは、提案者の思考を見極めるために情報量は重要だが、それが過密なプレゼンテーションにつながり、当選案が公表されると許されていく悪循環があることが指摘された。そして令和4年度には市の公共建築100周年事業の一環で、若手設計者を対象としたコンペを開催することも発表された。

その後のディスカッションでは、国交省のマニュアルの見直しや第三者による設計レビューの重要性、事業費が上がるリスクからコンペは敬遠されがちだが、それを



卒業設計コンクール 会場展示風景

回避する手法であるデザインビルドにも一定のコストの中で設計品質をいかに保つかという別の課題があること。1次の敷居を低くし2次でコストも含め精査することで事業費のリスクは回避できるが、審査には専門家を入れないと現実的な案を選べないこと、提案書にはある程度の枚数は必要でそのためには報酬も求められるべきだがそれを受け入れられる自治体はまだ少ないことなど、大変実践的かつ本音の議論が活発に行われ、課題の共有と今後の持続的な制度のあり方に向けて対話ができた意義は非常に大きいと感じた。

公開審査「神奈川7大学1専門学校卒業設計コンクール」

例年は地下鉄馬車道駅のコンコースという街に開かれた会場で行われていたが、改修工事のため今年は横浜市民ギャラリーで開催された。市民ギャラリーという場所柄、一般の方や親子連れ、他の企画展示からたまたま立ち寄った方などさまざまな来場者が見られた。

学生にとってはコロナ禍2年目でその影響も懸念されたが、映像作品を主体とするもの、マイノリティを対象としたもの、視覚実験をまとめたものなど、全24作品のテーマ設定は多岐にわたり、各自の関心や興味を掘り下げた成果が各作品の多様性に表れているという審査員の方のコメントに共感を覚えた。審査は、審査委員長の福島加津也氏、審査員の中村竜治氏、高橋一平氏、富永美保氏により公開で行われ、提案内容、プレゼンテーション、模型など総合力でバランスの取れた横浜国立大学 藤本梨沙氏の「諦めない人生を支える、まちの大給食室」が金賞に決定した。その後の選考は、今年作品の多様さを象徴するように審査員の票が割れ、混戦模様となったが、最終的には銀賞に東海大学 太田匠氏の「吊いの聚落」、銅賞に慶應義塾大学 円谷武大氏の「円谷英二特撮倉庫」が選出され、観戦者としては大変エキサイティングな公開審査であった。会場には旧根岸競馬場などの神奈川近代建築の解説や会員による近作のパネル展示も行われた。

昨秋のイベントと同様、シンポジウムは対面とオンライン同時配信を併用した開催形式とし、卒業設計コンクールの公開審査も含め、JIA神奈川のYouTubeチャンネルで配信を行っているので、ぜひご覧いただきたい。